態である。それ故に国家、科学、組織、階級等がその関心の対象であるのが、quasi(疑似的)-religionである。それについて特に著者は facism と communism に注目している。それらの宗教と、又本来の意味の宗教をも合わせて、それらの相互が出合う現代の状況を論じ(第一章)そこでの宗教自身の審判(judgment)の内容が、キリスト教を中心に種々なる角度から論じられている。その根幹をなす考え方は、いかなる宗教的集団も自己の基盤となる主張を持ち、それらの相互において reject か accept かの弁証法的結合(dialectical union)があるということであり、それについてキリスト教と他の宗教(第二章)、及びキリスト教自身の内部での批(判第四章)、という観点からの神学上の問題を歴史的に述べている。とりわけ仏教を、本来的宗教との出会いの代表的な例に選び、体系的な相互の対話の手がかりに両者の典型的な基盤としての主張を“Nirvana”と“Kingdom of God”に取り、その共通的な面と反撥し合う面の両極的な性質からそれぞれを論じている(第三章)。その章の最後に“history”に対する両者の理念として、著者はキリスト教は“participation”において仏教は“identity”においてその根本的相違を見ることができると述べている。そしてキリスト教にはそこから仏教では見れない改革的性格が出てくるので、quasi-religion との encounter では如何にそれを克服し得る性質があるかを指適しているのは注目されよう。全体的に著者特有の明快な論旨と文章で論述し、方法論的にも比較宗教学に新しい問題を示唆している。(古賀)

## 原始仏教教団の研究

佐藤密雄著

本書は原始仏教教団の組織運営や比丘の服務行事など、従来あまり研究されていなかった分野を、巴利文律蔵を解読することによって見事に解明した力作である。中国や日本の古来の律学では北伝の漢訳諸部律蔵が中心であったため、前半に説かれている比丘戒を解釈する部分はかなり解明されたが、後半の教団の組織運営などに関するものは、漢訳文自体にもやや混乱があって、あまり研究が進まなかったようである。ところがこの難解な部分が巴利文を参照することによって明瞭になり、ここに原始仏教教団の全貌が明らかになったといってよい。

また筆者は比丘戒以前に出家戒があったことを極力強調している。なぜなら、仏陀の初転法輪と同時に僧伽が成立したが、そのときには比丘戒はなかった。その後、比丘の中に出家として不応な行為をなすものがあって比丘戒が作られたのであるから、その行為を不応な行為と判断するには、比丘戒以前に出家戒があったはずである。その出家戒が如何なるものか、というのが本書の一つのねらいである。しかして南伝の長部及び北伝の長阿含の戒蘊にある梵網経や沙門果経等十三経の小、中、大の三種の戒は、比丘戒以前の出家戒であったとしてその出家戒の内容について論じていく。(舟橋尚)

A5・八七九頁・昭和三八年三月刊
定価三、〇〇〇円・山喜房仏書林